



Title	多文化の話し合いの「個人の経験を共有する活動」で目指される相互理解とは？：感情に焦点を当てる仕掛けの効果をめぐる
Author(s)	杜, 長俊
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 27, 52-72
Issue Date	2024-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92236
Type	bulletin (article)
File Information	27_p52.pdf



[Instructions for use](#)

多文化の話し合いの「個人の経験を共有する活動」で 目指される相互理解とは？

－感情に焦点を当てる仕掛けの効果をめぐって－

杜 長 俊

要 旨

国籍や文化が異なる人々がお互いのことを理解し認め合うことは、多文化共生社会の実現において必要不可欠だとされているが、多文化・異文化の人々が出会う様々な場面において参加者たちがどのようなプロセスで相互理解を目指すかに関する実情は十分に解明されていない。本論文では、多文化ワークショップ（「みんなでつくる 多文化えんげきワークショップ in EBETSU」）に参加する住民たちが、演劇を通して自分の経験を想起しその経験を他者と共有する活動の中で、住民たちがどのような水準の相互理解を目指すことができるのかを、会話分析の手法を用いて記述・分析を試みた。特に、ワークショップの運営側が用意する「感情に焦点を当てる2つの仕掛け」を、参加者がどのように利用し、相手の経験を受け止めるのかを中心に分析を行った。その結果、1つ目の「感情カード」という仕掛けにおいては、相手が話した個人の経験と、相手が提示した感情カードの結びつきは自分にとって理解・想像可能であることを示す行動、2つ目の「統一した感情を付箋に書く」という仕掛けにおいては、相手が付箋に書いた状況を想像しながら、相手の感情を自分の言葉で言語化する行動を通して、相互理解の達成が目指されていることが分かった。

【キーワード】 相互理解、個人の経験、多文化の話し合い、話し合いの仕掛け、会話分析

1. はじめに

多文化共生社会の実現に向け、国籍や文化が異なる人々がお互いのことを理解し認め合うことの必要性が叫ばれているが（総務省 2020）、そういった文脈においてはお互いのことを理解し認め合うこと（以降、相互理

解とする)は「理念」や「理想」として使われる場合が多いと思われる。一方、相互理解の中身や実情に注目したこれまでの研究では、発話の意味をめぐる解釈・理解(大平 2000)、文化や価値観をめぐる理解(梶原 2003)、人間関係を構築する方法としてのお互いの情報開示(杜・安 2023)など、国籍や文化が異なる相手と話す状況や場面において、様々な水準の相互理解が存在することが明らかになりつつある。本論文では、相互理解はあらかじめ定義できるものではなく、会話の場面や話題、そして、参加者の努力や志向により様々な水準で達成されるというスタンスをとり、「みんなでつくる 多文化えんげきワークショップ in EBETSU」(以下、多文化WS)という多人数の話し合いの中で、個人の出来事や経験を他者と共有する活動を通して、どのような相互理解がどのような方法で目指されているのか、実際の事例を通して明らかにする。

2. 先行研究

個人の出来事や経験を話すことは、会話分析の分野で「私事語り」と呼ばれる現象であり、その現象をめぐる研究成果が蓄積されている。例えば、串田(2006)は、先行の発話や相手の事柄や事情に関連づける形で語りを開始する事例をもとに、私事語りの導入の方法を分析した。森(2008)では、「私はアメリカで思ったのは…」というような分裂文がどのように私事語りを導入しているのか、私事語りの開始のメカニズムを明らかにした。そして、私事語りの受け手側も注目されている。例えば、平本(2011)では、「わかる」というような理解を述べる受け手の反応は、経験とそれへの見解や態度を語り手と受け手が「分かち合う」形で理解を示す現象として分析した。

さらに、Heritage(2011)では、固有な経験として語られたものに対して共感(empathy)を示すことが期待されるが、その一方で共感を示すほどの経験がない場合に、相手に語られた経験を何らかの形で受け止める事例を分析し、受け手にしては、相手の固有な経験の語りに対して共感を示す期待と、共感を示すほどの経験がない事実の間に生じるジレンマについて論じた。Heritage(2011)の議論を踏まえると、文化や背景が異なる多文化WSの参加者にも、個人の経験を共有する活動の中で、共感を示すほどの経験がない場合が多く、相手の経験を受け止める際に難しさが伴うことが予想される。本論文では、多文化の話し合いにおける自身の経験を共

有する活動において、受け手は運営側が準備する仕掛けを利用し、他者の経験をどのように受け止めるのかを記述するとともに、そのような仕掛けの利用によって達成される相互理解とはどのようなものなのかを明らかにする。

3. 分析対象

本論文では、個人の経験を共有する活動のために運営側が準備した「感情に焦点を当てる2つの仕掛け」に注目する。1つ目の仕掛けは、感情カードの使用である。2つ目の仕掛けは統一した感情（いらいらする気持ち）をめぐる経験を付箋に書く手順である。感情カードは、1回目と2回目の多文化ワークショップで使用されており、統一した感情を書く付箋は3回目の多文化ワークショップで使用されている。重複した利用がなかった理由は、1・2回目と3回目の話し合いの準備として行われる演劇の内容及び話し合いの問いかけが異なるからである。

1回目の話し合いは、ゴミ捨て場における隣人とのやりとりについて3つの状況の寸劇を見て、どの状況が最もあなたの状況に近いのか、その状況に対してあなたはどんな感情を持つのかという問いかけに沿って進化した。3つの状況とは、「会話や挨拶がない」、「挨拶をしあう」、「自己紹介をしあう」の3パターンである。感情カードは自身の状況に対してどんな感情を持つのかを示す補助道具として準備された。一方、3回目の話し合いは、怒る・怒られる場面として4つの状況（挨拶をしない、遅刻をしてしまう、作業中に携帯を操作する、私語を言う）が、ワークショップの場での自発的な出来事であるかのように演じられ、参加者はその場の当事者としてこれらの出来事を経験した。その後、4つの状況について実際の経験があるかどうか意見交換をした後、「町、職場、学校でいらいらする状況を付箋に書き、書いた内容を共有する」という指示に沿って話し合いが進行した。

1つ目の仕掛けの感情カードは、Ekman (1982) が通文化的なものとして提示した6つの基本感情に、寸劇の台本を読み複数のプロジェクトメンバーが感じた5つの感情（「安心」「緊張」「無感情」等）を加えた11枚のカードからなる。カード表面には感情を表す顔のイラストを載せ、その左右に日本語と、外国籍の参加者が理解する3言語の翻訳を記載した。2つ目の仕掛けの「統一した感情を書く付箋」は、1回目の話し合いにおいて

日本語話者の語りの発話時間が長く情報量が多いため、外国籍住民（特に、初級レベルの日本語学習者）にとって難解だったという反省を生かすものであり、テーマを「いらいら」という1つの感情に統制し、なおかつ付箋に書かせることで、情報量の落差の最小化を目指した。

4. 事例分析

4章では、多文化WSの話し合いの中で、参加者が自身の経験や状況を共有する事例を4つ取り上げる。まず4.1では、話し手が感情カードを提示し自身の経験や状況に対する感情を示す事例を分析する。そして4.2において、「いらいらする感情」をめぐる出来事を付箋に書いて、書いた内容を共有する事例を分析する。最終的に、感情に焦点を当てる仕掛けの利用により、多文化・多人数の話し合いにおける個人の経験を共有する活動の中で、参加者たちが目指そうとする相互理解の実態を明らかにする。

4.1 感情カードを提示する事例

次の事例1は、ゴミ捨て場で隣人に出会う場面の寸劇を見た後で、参加者がどのシーンが自分の状況に最も近いのか、座席順に話しているところである。図1が示した通りに、6名の参加者がテーブルを囲んで座っており、話す順番は「池田」→「ファム」→「グエン」→「通訳」→「山口」→「小林」である。事例の1行目で、山口がファムに「じゃあ。」と、手の裏をファムに向け、次に話す順番をファムに促している。それに対し、ファムは発話を開始していないが、自身の順番が来ているという理解をジェスチャーで示している（3行目）。その後、ベトナム語を使って通訳にどんなことをしたらよいか確認したうえで（4行目）、Figure 1が示したように、手元にある感情カードを1枚ピックアップし、山口、池田たちがそのカードを見られる位置（テーブルの中心付近）に提示している。それを受け、山口、池田、通訳はファムが提示している感情カードに、それぞれの認識を示している（5行目）。この事例では、39・42行目の山口の「で むかんじょう ってことなんですね?」「>なるほど.なるほど.<」という発話に注目する。この発話を通して山口がどのような理解を示そうとしているのかを明らかにするために、それまでのやりとりを確認しておこう。

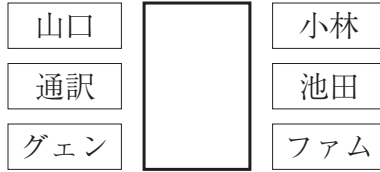


図1 事例1と2の参加者の位置

事例1

- 01山口：じゃあ。
 02 (0.5) (山口視線をファムに向け、手の裏をファムに向けている)
 03 (0.5) (ファムが自分を指さす)
 04 <<通訳とファムがベトナム語で30秒ほど話す>>
 05 (2.0) #

#Figure 1



- (ファムが1枚のカードをとって、山口、池田、小林が見える位置にカードを提示する)
 (通訳が山口のほうに視線を送って、ファムの持つカードに指をさす)
 (山口がファムの持っているカードに向かって体を乗り出し、目を凝らす)
 (池田がファムのカードに視線を送り、4回小さく頷く)

- 06山口：む↑か(h)んじょう (ファムが頷く) あ：
 07 シーン どれですか。自分の：住んでいる場所は。
 08 一番 どの (.) いちからさんの： シーンの中で 近いですか？状況は。
 09 (1.0) (ファムが通訳に視線を送る)
 10 <<通訳が20秒ほどベトナム語で話す>>
 11通訳：え：と シーン- シーンいち は： (1.0) 挨拶 しない？
 12山口：[>うんうんうんそうです[そうです< (山口が頷く)
 13池田：[>うんうんうん. <
 14通訳： [シーン2 は： (1.0) (演劇の台本をめくる)
 15 挨拶 します。

16山口：[そうですね. はい.
17池田：[うん.
18通訳：シーン3は：
19池田：うん.
20 (0.4)
21山口：コミュニケーション 積極的にとっている.
22通訳：あ：
23 <<通訳とファムがベトナム語で20秒ほど話す>>
24通訳：シーン シーン2.
25山口：<シーン 2.> (ファームに視線を送って、指を2本たてる)
26池田：うん.
27山口：で [むかん-
28通訳： [挨拶 でしか： [あまり：： した：しくない.
29山口： [あ：：
30池田： [うん.
31ファム：[<<ベトナム語で話す>>
32山口： [あああ：
33通訳： うん：
34ファム：<<ベトナム語で話す>>
35通訳：ときどき： [ん： あいます. はい.
36山口： [あ.
37池田： [うん.
38山口：なるほど.
39山口：で むかんじょう ってこと[なんですね？
40通訳： [はい. (ファムが大きく頷く)
41池田：ん：：
42山口：[>なるほど. なるほど. <
43通訳：[むかんじょう hh

まず、山口は6行目で、「む↑か(h)んじょう あ：」と、ファムが提示している「無感情」のカードに認識を示している。その時、カードに印字されている文字を単に読み上げるだけではなく、「あ：」というように、ファムが自分の状況に対して無感情というような感情を持っている表明に気づいたことを示している。さらに、「む↑か(h)んじょう」というように、音声のピッチを急激に上げ、笑いを伴うことから、山口は、いまここでファムが表明した感情を、予想していない、何らかの意外なものとして

受け止めていることが示される。そして、7・8行目で「シーン どれですか。自分の：住んでいる場所は、一番 どの (.) いちからさんの：シーンの中で 近いですか？状況は。」と、運営側が指定した質問を自分の言葉に置き換え、その質問をファムに向けている。ファムは10行目で通訳に質問の意図を確認し、通訳は山口に11行目でシーン1、14・15行目でシーン2、18行目でシーン3の特徴を確認し、23行目で確認したことをベトナム語でファムに伝えている。

24行目で通訳は、「シーン シーン2。」という発話を産出している。この発話は、通訳がファムにベトナム語で話した後で、3つのシーンの中から1つを選んでいることから、ファムの状況に一番近いシーンとして回答していると理解することができる。それに対する山口の反応を見ていこう。25行目で「<シーン 2.>」と、発話の速度を遅め、指を2本立てることから、その回答を丁寧を受け止めていると言えよう。そして、27行目で「で むかん-」と、「で」という助詞を用いて、シーン2という回答を踏まえてファムが表明した無感情に言及しようとしているが、28行目の通訳の発話と重なって中断した。

重なった28行目の通訳の発話は、「挨拶でしか： あまり：： した：しくない」と、「親しくない」という情報を加え、ファムの状況をより具体的に説明するものである。通訳の発話に続いて31・34行目でファムがベトナム語で話したが、通訳は35行目で「ときどき： ん： あいます。はい。」と、その内容を日本語に翻訳している。こうしてファムが通訳を通して自分の状況を説明する過程において、山口は29・32・36・38行目で理解ができている状態であることを示し続けている。その直後に、39行目と42行目の発話が産出されている。

39行目の発話は、「で むかんじょう ってことなんですね？」と、山口は、ファムが通訳の力を借りて表明した状況が、無感情という感情を持つ事実に結びついているという理解が合っているかどうか、ファムに確認している。このことから、ファムが置かれている状況と、無感情という感情を持つことの結びつきが理解・想像できていることが示される。さらに、「>なるほど. なるほど. <」と、その結びつきは合理性があることを主張している。これらの発話は、無感情は予想と違っているという理解を示した6行目の発話を踏まえると、その後の話し合いを介して、相手の経験と相手が提示した感情カードの関連性が理解・想像できる水準に達したと

いう理解を示していると言えよう。

次の事例2は、事例1の1個前の順番で池田が自分の経験の話を終えたところである。この事例では、池田が感情カードを2枚出した後で、ゲンや通訳が取った行動に注目する。池田は事例の直前に、自分の状況はシーン3に最も近いことを述べ、トムという外国人の友人の話や、トムとの関係性を紹介した。通訳が1行目で池田の話をベトナム語に翻訳し、その間、ほかの参加者は会話をせず、通訳が終わることを待っていた。2行目で山口が「↑カードでいうとどれなんですか?」と感情カードを提示することを促し、池田は6行目で「カードだから 安心: じゃないかな=楽しみとか。」と、安心カードと楽しみカードを見せ、8行目でその理由を付け加えている。

事例2

01通訳: <<30秒間の通訳>>

02山口: ↑カードでいうとどれなんですか?

03 (0.8)

04池田: う[ん?

05山口: [カード, カ-この↑カードで選ぶとしたらその,

06池田: カードだから 安心: じゃないかな=楽しみとか。(2枚のカードをテーブルからとる)

07山口: 安[心とk- (ゲンが手元にあるカードに目線を落とす)

08池田: [トムに会うと: うれしい: (山口に2枚のカードを見せる)

09山口: ああ ああ [#ああ ああ (ゲンが安心カードを池田に見せる)

10通訳: [(手でカードに注目するようにファムに指示する)

#Figure 2



11池田: うん。(池田が手に持ってる1枚のカードをゲンのカードに近づける)

12山口: ああ ああ ああ ああ 安心。(ゲンのカードを見る)

13通訳： 安心と [：安全。
14山口： [ああ ああ ああ ああ
15通訳： トム トムに にいる時
16池田： うん。
17通訳： 安心=
18山口： =[あ、
19池田： [トムの<人間性>が：
20通訳： あ：：
21池田： <いいん(.)だよな?>
22通訳： <<グエンに向かって通訳している>>

池田による感情カードの提示を受け、山口は7行目と9行目で認識を示している。その間に生じているグエンの行動に注目しよう。まず、7行目の時点で、グエンは手元にあるカードに目線を落としている。9行目の山口の発話の間に、安心カードを池田に見せている。これらの行動は、池田の出した安心カードに同じカードを出すことから、グエンが感情カードに対する認識ができていることを示していると言えよう。実際に、11行目で池田は、自分が手に持っている安心カードをグエンのカードに近づけるとともに、「うん。」と、グエンの認識が合っていると承認をしている。さらに、池田が出した2枚のカードのうちの安心カードに認識を示していることから、グエンは何らかの理由で安心カードにグエンが興味や関心があることが示される。グエンのこの行動をきっかけに、通訳は15行目、17行目で「トム トムに にいる時」「安心」というように、安心という感情と、池田が話した友人の話との結びつきについて、自分なりの理解や解釈を示している。それに対して19・21行目で池田は、トムの人間性がいいことを述べ、安心という感情を持つ理由を示した。このように、話し手が複数のカードを提示するほど感情が複雑な場合において、受け手たちが自身の関心や興味を踏まえて1枚の感情カードに絞り、話し手が話した状況とその感情の関連性をめぐる相互理解を目指すことができることが明らかになった。

4.2 統一した感情を付箋に書く事例

4.2では、いらいらする経験や出来事を付箋に書いて、書いた内容を共有するという、第3回多文化WSで行われた活動の事例を分析する。次の事

例3と事例4は、日本籍住民2名（田中、森田）、インドネシア籍住民2名（通訳のエルサ、アリ）、アメリカ籍住民1名（ジョン）の5名が参加している。座る位置は図2が示す通りである。事例3の直前では、アリがなかなか付箋を書き始めないことで、エルサが「何でもいい」「英語でもいい」と、付箋を書くことを促していた。事例3の1行目は、田中がテーブルに貼ってあるジョンの付箋に注意を向け、書かれた内容について尋ねているところである。それを受け、ジョンは2・4行目で付箋に書いた内容を読み上げ、英語で書かれた内容を7行目で日本語に翻訳することで、田中の質問に答えている。この事例では、ジョンの感情を想像・実演するという受け手たちの発話に注目する。

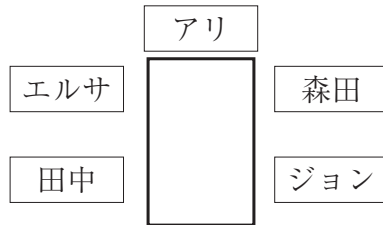


図2 事例3と4の参加者の位置

事例3

- 01田中：ジョンさんは なんて [か-(ジョンが書いた付箋に触る)
 02ジョン： [Somebody a: s- some- (0.2) 英語で、
 03森田： どう[いうこと？
 04ジョン： [Someone who talks a lot but never contributes to the groups;
 05エルサ： [contribute to the-
 06森田： [グループで：
 07ジョン： シャベリで： (0.2) [なんか 手伝わない。
 08エルサ： [グループ-
 09 (0.5)
 10エルサ： あ[：：
 11田中： [あ：：
 12田中： .h 話し合い[： 話し合いに： (0.4) [<-
 13エルサ： [話す- [>わかるわかるわかる<
 14田中： ちゃんと 入ってください：って？ (田中が両手を動かしジョンの顔を見る)

次に、田中の受け止め方について見ていこう。12行目で「.h 話し合い： 話し合いに： (0.4) ぐ-」と、ジョンの話は話し合いの場面に生じているという理解を示している。この発話は、7行目のジョンの日本語での説明に対して、田中が11行目で「あ：：」と理解を主張した直後に開始していることから、7行目の「しゃべりで：」というキーワードをもとに、「話し合い」という理解に至っていると考えられる。その後、14行目で「ちゃんと 入って下さいって？」という発話を産出している。この発話は、ジョンが説明した状況を踏まえると、相手にジョンが言うであろうセリフを実演する形で、ジョンの説明に対して理解を示すものとして聞くことができる。実際、ジョンは15行目で「そ.そ.そ.そ.」と、田中の理解を承認している。さらに、田中は17行目で「はいっー 入らない： ひと： がいると： いらいらする.」と、ジョンの呼びかけに従わない人がいることを、ジョンがいらいらする理由として述べている。ジョンは18行目で「はい.」と、その理解を承認している。こうしたジョンの承認を得た田中は21行目で「↓うん：： あ：： >なるほどなるほど<」と、ジョンの話をも十分に理解できていることを表明している。

最後に、森田の受け止め方を確認しておこう。ジョンの話を書く参加者の中で、森田は最も早いタイミングで理解の問題があることを示した（3行目、6行目）が、ジョンの話に対して理解ができたことを示したのは、20行目の発話以降である。まず、20行目で「へ：：：：」と、新しい情報を受け止め、ジョンの話に対して理解できたことを示しているが、この理解の示し方は、12行目から19行目まで行われた田中とジョンのやりとりを聞いて一定の理解に至っているという、ジョンの話に対する理解は間接的にできたことを表している。そして、24行目で「入ろうって？」という発話を産出している。この発話は、引用の形式を用いて、ジョンが言うであろうセリフを実演し、状況の理解を示しているが、「入る」という動詞を用いていることから、14行目の田中の発話を踏まえたものとして理解される。他方、腕を自分とジョンの間に何度か移動させる動作を伴い、相手に話し合いに参加してほしいという気持ちをより具体的に演じ、自分なりの理解を表示していると言えよう。それに対して、25行目でジョンは「はい.」と理解を承認し、27行目で笑っている。

27行目の笑いはどんな含意を持つものとして理解されるのであろうか。24行目の森田の発話が14行目の田中の発話と同じように、ジョンの話に対

する理解が合っているかどうか確認する行動として理解されると考えられる。その場合は、24行目の発話は、同じような理解をもう1度確認することから、14行目の発話に対して産出した「はい」以上の反応、または「はい」と異なる反応が期待される可言えよう。このことを踏まえると、27行目のジョンの笑いは、自分の気持ちについてももう少し詳しく言うことが期待されているが、「はい」という発話を産出することでその期待に込えていないという自覚を示すものとして理解できる。

その後、森田は28行目で「レッツ- レットトークみたいな感じ。」という発話を開始している。この発話は、ジョンの第一言語である英語に切り替え、ジョンの気持ちに対して直接的な理解を目指している可言えよう。その一方で、「Someone who talks a lot but never contributes to the groups:」（たくさん話すがグループに貢献しない人）というジョンの英語での発話を踏まえると、森田の理解が必ずしも正しいとは言えない。森田の発話に対してジョンは、28行目の時点で体を後ろに引き、30行目で笑いを産出している。これにより、森田の理解が間違っていることを指摘する機会を差し控え、この話に付け加えることがないことを示すことで、この話題を終了させようとしている。こうした行動をとったのは、ジョンがいまここで森田の理解を正すことで、森田の理解が元になる田中の理解も正す必要が生じ、会話を振り出しに戻してしまうため、時間や労力がかかることを予想した可能性がある。

それに対し、森田は32行目で「そっか：：」というように、ジョンの話が理解・納得できたことを主張しつつ、遠くを見つめるという非言語行動を通して、その理解の過程がまだ途中であることを示している。そして、35行目で「ん：：： でも なん-」と、ジョンの話に対して違う観点から自分の意見を述べ始めている。この発話は、エルサが森田の書いた付箋に注意を向けたことで中断したものの、ジョンの話に対して自分の意見を表明しようとし、ジョンの話題を継続している。以上のことから、多文化ワークショップという多人数会話の場面において、自身の気持ちを他者と共有する活動の中で、どんな水準の相互理解を目指すかは、参加者たちがリアルタイムで交渉をした結果である可言える。

まず、ジョンは、受け手の田中と森田が自分の状況を想像し自分の気持ちを言語化している中、理解の問題があったとしても、時間や労力をかけて受け手たちの理解を正し、自分の気持ちを厳密に理解してもらう必要が

ないという判断をし、その話題を終了させようとする振る舞いを見せた。そして、森田は、自分の理解が正しくない可能性には気づかずに、ジョンの気持ちに対して自分の意見や経験を表明し、相手に対する理解を深めようとした。最後に、エルサはその話題についてジョンが話すことがないことを示した振る舞いを見て、森田が書いた付箋に注意を向け、話し合いを次へ進行させたわけである。結果的に、以上のように、理解の問題が解決されないまま会話が次へ進行した。この事例からは、英語で書いた付箋の内容を日本語で説明するときに生じた誤解を解き、自分が言いたかったことを明らかにすることで言葉の壁を乗り越えて相互理解が深まる可能性と、相手の感情を理解しそれに対して「自分の経験や観点を伝える」等の行動をとればお互いの経験や意見の違いを認めて相互理解が深まる可能性があったことが示唆されている。

次の事例4は、相手の感情を想像し言語化することで、受け手が語り手に対する理解を深めようとする事例である。森田が1行目でアリが書いた付箋に注意を向け、書いた内容について尋ねており、それを受け、2・3行目でアリは書いた内容を読み上げている。それに対して、エルサが5行目で「おかし(h)のこと？」と、森田が10・12行目で「その人って」「その人 だれ。」と、それぞれ理解の問題があることを示しているため、アリは13・15・17行目で「えと： 会社」「ん(h)ん(h) 会社-」「日本人ねhhh」と、理解の問題を解決しようとしている。その後、森田が18行目で、エルサが20・22行目で、それぞれ「おかしい」という部分に関する理解の問題を提示しているのに対し、アリは、26・28・30・32・35・36・38・41・44・46行目で、仕事内容が分からない会社の新人が仕事のミスをする度に怒られるというエピソードを語り、付箋に書いた「おかしいのことば」という部分における理解の問題を解決しようとしている。

事例4

- 01森田：これ 何. (アリが書いた付箋に指をさす)
02アリ：その人しか おかしいのことば： が：
03 いつも シャベリ(h)ま(hh)す(h) [HH]
04森田： [hh]
05エルサ： [おかし(h)のこと？]
06田中： ああ：

07アリ： [.h .hh
 08森田： [()
 09アリ： .h
 10森田： その人っ[て
 11アリ： [な(h)んか(h)
 12森田： その人 だれ. (アリの付箋に指をさす)
 13アリ： えと：： 会社
 14森田： 会社の[人.
 15アリ： [うん(h) [かいし-
 16森田： [あ：：
 17アリ： 日本人ね(h) hhh
 18森田： おかしなことってどんな[こと(h)[HAHA
 19アリ： [でん-
 20エルサ： [どの おかし？
 21森田： hh
 22エルサ： あの？ こと？
 23アリ： なんか： (0.5) ん：
 24森田： (鼻を吸う音)
 25 (1.2)
 26アリ： えと： あたらしいの：：： 人が：
 27森田： うん.
 28アリ： あu- はじめて 会社に[：
 29森田： [うん.
 30アリ： はいって[：
 31森田： [はいって
 32アリ： 仕事が： まだわから[ないし
 33森田： [わからないよね[：
 34田中： [>うんうんうん<
 35アリ： えと それは： (.) えと なんか いつも おこってる：
 36 できないなら： (0.2) いつも おこれ- おこれる(h) h
 37エルサ： あ：[: : :
 38アリ： [おこり[ます
 39森田： [あ：：
 40エルサ： 仕事 へた[：
 41アリ： [でも みんな まだ わから[ない
 43森田： [>わからない<

- 44アリ： え：と 仕事が間違ったら： (1.2)
 45エルサ： 当然.
 46アリ： ちゃp-# (空中で指で何かを突く動作をする)
 #figure 3



- 47 [hhh .h hh (田中の顔を見る)
 48田中： [ん： [でも わからない：
 49森田： [それってこれじゃ↑ない (田中が書いた付箋を指さす)
 50田中： うん. (付箋に目線を落とす)
 51森田： [hhh
 52田中： [わからないのも [<怒られるのは：>
 53エルサ： [あ： きもち：(森田が指さした付箋を見る)
 54田中： [こん-
 55エルサ： [そうですね.
 56田中： ねえ.
 57 (0.4)
 58田中： それは： (0.2) >どうしたらいいんでしょ< (視線を下に向けて両手を横に開く)
 59田中： hu [ahhh (アリの顔を見る)
 60アリ： [hhh (田中の顔を見る)
 61田中： ねえ, わからないのに 怒られるって：(アリを見て、手を自分の体に近づける)
 62 それは： ど どうしたらいい[んだろう. (顔を下に向く)
 63森田： [うん.
 64エルサ： ねえ：
 65 (2.0)
 66エルサ： [なんか 日本にいる外人としては： 日本の文化？
 67森田： [そうね.

この事例で注目したいのは、アリが明かしたエピソードを受け止める田

中の一連の発話である。その前に、アリのエピソードについて確認しておこう。まず、アリは26・28・30・32行目で、会社の新人が仕事内容が分からないというエピソードの背景状況を示している。そして、35・36・38行目で、ミスをする度に会社の新人が上司に怒られているという登場人物の関係性を示したうえで、41行目で「でも みんな まだ わからない」と、自分も怒られる側の人間であることを表明しながら、怒られる側からこの出来事は不条理であると感じる理由を明らかにしている。44行目で「え：と 仕事が間違ったら： (1.2)」と、ミスをした場合にどんな結末があるかを示そうとしている。その際に、空中で指で何かを突く動作を伴い、「ちゃp-」と怒る人の仕草を実演することから、この発話はアリのエピソードのクライマックスとして理解することができる。その直後に、アリの笑い(47行目)が生じている。このタイミングで起る笑いは、いまここで演じている状況は、深刻なトラブルとして捉えているわけではないことを示すとともに、その不条理な状況に対して笑うしかできないというような気持ちを示すものである。その時に、アリが田中の顔を見ている(47行目)ことから、田中はこの気持ちに対して何らかの反応を示すことが期待されていると考えられる。

田中の反応を見ていこう。まず、48行目で田中は、「ん：： でも わからない：」と、仕事が分からないという状況に言及する発話を開始している。その発話とほぼ同時に、森田が49行目で「それってこれじゃ↑ない」と、アリが話したエピソードと、田中が付箋に書いた話の間に共通性があることに気づいたことを示している。それに対し、50行目で「うん。」と同意をしているが、52行目で「わからないのも <怒られるのは：>」と、自分が書いた付箋との共通性ではなく、アリの話した状況に言及し48行目の発話を再開している。この発話は、「怒られるのは」という部分をゆっくり産出するとともに、「～のは：」というように、統語的に続きがあるものとして産出している。このことから、田中はアリが怒られる人の気持ちを、自分の言葉で表現するという行動を行うことが予測できる。

後続の展開を見ていこう。エルサが53行目で森田が指さした付箋に注意を向け、55行目で2人の話の共通点に気づいたことを示し、それに対して田中は56行目で「ねえ。」と同意を示した。しかし、その後の58行目で「それは： (0.2) >どうしたらいいんでしょ<」という発話を開始している。この発話は、対策や方法が分からない人の気持ちを表現しているた

め、アリがこれまで話した状況を踏まえると、不条理な怒り方をされて困惑している気持ちを表明していると理解することができる。その直後に、田中とアリがお互いの顔を見て、ほぼ同じタイミングで笑いを開始している。共に笑うという行動により、不条理な怒り方に対する気持ちが2人の間で一致したことが示されている。さらに、その後、田中が61・62行目でその気持ちをもう1度表明しているが、「それは： ど どうしたらいいんだろう。」という発話を産出する際に、顔を下を向けている。このことから、この発話は、誰かに宛てる発話ではなく、心の中の声を表現するとともに、顔を下を向ける動作が「落ち込む」「挫ける」というような含意を持つため、怒られる人の気持ちを体を使って精一杯想像していることを示す行動として理解することができる。このように田中は、アリが書いた付箋と自分が書いた付箋の共通性が指摘されたのにも関わらず、アリが話そうとしている気持ちを想像し言語化する行動を選択している。この選択は、気持ちが同じであることを安易に主張し共感を表すよりも、相手の立場に立って相手の気持ちを想像し言語化できる水準での相互理解を目指すべきという志向に基づくものであったと考えられる。

5. おわりに

以上、多文化WSの参加者が自身の経験を共有する活動の中で、受け手たちがどのように受け止めるのか、4つの事例を分析した。事例1と事例2では、話し手が話した経験と提示した感情カードの感情の結びつきを、受け手が理解・想像できることを示すという方法で、相互理解を達成しようとしていることが分かった。そして、無感情のような具体的な説明が難しい場合や、複数の感情カードを提示する感情が複雑な場合でも、話し手が置かれた状況と、そのような感情の結びつきに対する理解を示すことで、その感情はありうるのだというように、話し手の感情に対する理解可能性と合理性を認める形で、相互理解を目指そうとすることも明らかになった。事例3と事例4では、話し手が付箋に書いた状況を踏まえて話し手の気持ちを、受け手が想像し言語化を試みたりする形で、相互理解が目指されることが分かった。相手の気持ちを言語化する行動は、単なる偶然として起こる出来事なのであろうか。第3回目の話し合いでは、統一した感情を付箋に書くという仕掛けによって、感情が共通のものに設定され、状況と感情との結びつきがあらかじめ運営者側によって担保・保障されていた。こ

のにより、相手の感情は自分にとって理解・想像できるものであるという理解を示すために、相手が話した状況を想像し自分の言葉で相手の感情を表現するという行動が取られるのではないかと考えられる。この行動について、本論文では、外国籍住民の経験を共有する事例を中心に分析したが、日本籍住民の経験を外国籍の住民がどのように受け止めるかについて、引き続き事例分析を重ね、議論の厚みを増していきたいと考えている。

最後に、多文化共生社会の実現における本論文の課題を述べ稿を閉じる。本論文では、共感するほどの経験がない場合でも、相手の経験を受け止め、相互理解を目指す方法を記述できた。例えば、事例1の山口は、隣人とのやりとりに対する無感情という感情の持ち方に対して、自分の常識や経験において異質なものとして感じていたが、外国籍住民のファムが通訳を通じて必死に伝えた状況を聞いてその感情があり得るのだという理解に至り、その理解を示すことができたわけである。事例4の森田は、アリが書いた付箋と自分が書いた付箋の共通点を指摘されても、アリの感情を独自なものとして受け止め、その気持ちを自分の言葉で言語化し、想像という形でアリの感情に対する理解を目指している。このような相互理解は、国籍や文化が異なる人々が、単に同じ場所でもに過ごすことで自動的に発生するものではない。本論文の分析結果は、相互理解を深める個人の意思、そして、それを引き出したり支援したりする仕掛けがあれば、多文化共生社会が実現する可能性を示唆している。今後、文化や国籍が異なる人々が相互理解を深める活動、仕掛け、参加者の努力や思考を可視化するとともに、どんな方法を用いて、どんなことに焦点を当ててどの水準の相互理解を目指していけるのか、実践と研究の往還を通じて明らかにしていきたい。

参考文献：

- 大平未央子 (2000) 「日本語母語話者と非母語話者のインターアクションにおける相互理解の構築－関連性理論の観点から－」『日本語教育』105 pp.71-80
- Ekman, P. (1982) *Emotion in the human face*, 2nd ed., Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2011). Territories of knowledge, territories of experience: Empathic moments in interaction. In T. Stivers, L. Mondada, & J. Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation*.

- pp.159-183. Cambridge, England:Cambridge University Press.
- 平本毅 (2011) 「他者を「わかる」やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62巻2号 pp.153-171
- 梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人学生との交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117 pp.93-102
- 串田秀也 (2006) 「6章 経験を語り合うこと」『相互行為秩序と会話分析 - 「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』pp.210-268 世界思想社
- 森純子 (2008) 「会話分析を通しての「分裂文」再考察- 私事語り導入の「のは〜」節」『社会言語科学』10巻2号 pp.29-41
- 総務省 (2020) 「多文化共生の推進に関する研究会 報告書 - 地域における多文化共生の推進に向けて-」
https://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf 2024年1月閲覧
- 杜 長俊、安 祥希 (2023) 「日本語話者との初対面会話で相互理解を目指す学習者の質問-遠隔授業で学んだことを生かすビジターセッションについて-」『学習院大学国際センター研究年報』9 pp.41-58

会話トランスクリプトの記号一覧

[オーバーラップの開始
h	呼気音・笑い
(h)	笑いながら発話をする
.h	吸気音
発-	言葉の不完全な途切れ
=	発話間の間隙がない
(m.n)	()内の秒数の間合い
(.)	0.2秒以下の間合い
()	聞き取り不可能な部分
(言葉)	聞き取りが確定できない部分
(説明)	その行にある発話や沈黙と伴う非言語行動
:	直前の音の引き延ばし
↑	音調の極端な上がり
↓	音調の極端な下がり
発話	下線部分に強勢

.	下降調抑揚
,	継続を示す抑揚
?	上昇調抑揚
> <	発話のスピードが目立って速い
< >	発話のスピードが目立って遅い
#	Figureの生起タイミング
<< >>	日本語以外の言語での発話

とちょうしゅん（北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部准教授）